

〈共同研究報告〉

明治「史談」、その読者

目野由希

はじめに

明治末、広義の「文学」は小説や詩歌・戯曲等に特化され始める。その際、小説でも歴史でも伝記でもなかったグループは、どこに消えたのだろうか。

たとえば現行の「歴史」に近いグループ（史伝、史談、実録など）。再編成や消失を経て現在に至っているが、本稿では、これらであまり言及のなかった「史談」について、若干の考察を試みたい。「史談」の意味内容は「史伝」と近似し、明治から昭和期の用例は「史伝」より多い。しかし鷗外で名をはせた「史伝」に比すると、文学研究のフィールドでは先行論が少ない。その用例は明治二十四年から三十三年頃の教科書副読本、宗教の宣伝、史談会出版物や偉人伝・漢文学習用テキスト、回想録と、幅広い。これらテキストに冠せられ、特殊化にいたる過程の全貌を追うのは困難であり、こ

では一部に言及できたに過ぎない。それでも、この語の変遷を追うことで、「文学研究」をジャンル論的るときほぐす一助にはなるかもしれない。

本稿では、明治期の事例を中心に考察する。

1 明治期「史談」のフレーム

明治期にまとまった質量で流布した「史談」を概観する場合、①小学校令によって、郷土の歴史と地理を教えるため、明治二十四年から三十三年までを中心に刊行された「史談」「郷土史談」¹⁾、これに類する名の副読本、②大槻磐溪『近古史談』（開国主義の蘭学者大槻の、逸話による日本中世・近世史）とその解釈資料、③②を歴史・漢文等学習テキストとしたものの、三種の流れをみることとなる。

前記三種とは異なる「史談」も数多く刊行されており、ことに史談会出版物や啓蒙的な宗教書が、しばしば「史談」である。こちら

については後述する。

国立国会図書館のNDL-OPACで、一八六八(明治元)年から一九一三(大正二)年までの「史談」刊行資料を検索すると、百九十七件が該当する。その約半数が、①の史学地理用小学校副読本の「史談」「郷土史談」とその類になる。むろんこれは当時の状況の正確な反映ではなく、国会図書館固有の状況⁽²⁾にすぎないので、実数はより大きいと考えられる。

②の大槻『近古史談』は、そのままのタイトルで十二、「原文集」や「註解」なども含めるともう少し増える。菊池真一氏によると、

「『近古史談』は」明治・大正・昭和初期と武辺咄の珠玉集として、『常山紀談』と共にもはやされた。(残念なのは、本文が、『常山紀談』は要約されたものであり、『近古史談』は漢文に翻されたものであったことである。この結果、武辺咄は、今日に至るまで、まともに研究対象として取り上げられなかった)

『近古史談』は、『常山紀談』よりは分量的にコンパクトであり、内容的にも遙かにインパクトの強いものであったため、正に、人口に膾炙すると言っても良いほど愛誦された話が多かったことであろう。今日でも、講談ネタとして、しばしば演ぜられる話が幾つかある。⁽³⁾

同書は一八五四(安政元)年の版と、十年後の一八六四(元治元)年の四部百三十条になった版の二種がある。短い逸話集であり、その漢訳のため、本文は厳密な史実を学ぶよりも「簡潔明快で華麗」「平明な漢文」による歴史を味わうのに適する。⁽⁴⁾この特徴は、菊池氏の言及から想定される青年以上の読者層、そして枳場の客たちや朗吟中心の受容層だけではなく、③の教科書・参考書的な受容を行う層を生み出すことにもなった。

つまり、『近古史談』は郷土教育とは別に、教科書(ないし副読本)となったのである。もちろんそのままでは初等教育用の歴史読本・漢文のテキストとしては高度なので、学習者や学制の内容に合わせ、不要な箇所を削除した形で採用された。それが、大槻文彦刪修『刪修近古史談 全』(大槻文彦、一八九九(明治三十二)改訂、初版一八八一(明治十四))であろう。また、様々な出版者・出版人による同書の訳注や用語解説が確認できる。例えば藤江卓三解・大槻如電校・大槻文彦訂『刪修 近古史談詳解』(三木書店、一八九四)、酒井門次郎編・高木展為校『刪修近古史談字類大全』(小倉常七、一八八四)などはやや難しいようではあるが、これに該当する。大槻磐溪著・大槻如電補『補正 近古史談』(三木佐助、一八九六)なども含めると、同じ国会図書館所蔵資料の一八六八年から一九一三年の間では、十種ほど確認することができる。

大人向けの講談本や大衆小説や訓話の世界では、大正期以降も、『近古史談』は広範囲に流通した点は、すでに菊池氏の指摘すると

ころである。そして、「史談」はこのように、「郷土史談」と『刪修近古史談』の二種類のテキストで、全国の児童に伝播していったという面も、持ち合わせている。

2 史談叢書

明治期の「史談」を読みすすめてゆくと、啓蒙性のある宗教資料も「史談」の名が冠されていると気付かされる。歴史を語りかけるテキストというより、児童向けの啓蒙用テキスト、あるいは一般向け啓蒙用テキストが、「史談」と称されているわけだ。これらは、「史談」という角書を冠し、同一のジャンル意識を共有すると考えられる。

宗教的な啓蒙書では、杉山重義編『一読三嘆智恵之泉 一名・泰西今古史談』（警醒社、一八九二）、山田寅之助『エデンの花園』（通俗旧約史談）第一編、教文館、一八九七）などはいずれも、キリスト教布教用資料である。『エデンの花園』の文中には万葉集の引用なども見られ、問口の広い印象を受ける。この他、仏教ならば布教奨励研究会編『西行法師 仏教史談』（森江書店、一九一〇）、神道ならば井上斉編『神社史談 和光同塵 一名・神と信仰』（長野県神職合議所、一九〇二）などが管見に入った。

『西行法師 仏教史談』は、巻末広告によると『エデンの花園』が「通俗旧約史談」の第一編であるのと同じく、「仏教史談叢書」の最初の一冊である。第二編以降は実見していないが、少なくとも国会

図書館はこれらは第一編のみの所蔵である。

巻末広告頁の「本叢書内容に附いて」の箇所には、

内容は極て平易なる説教口調を以て誰人にも解し易き史談となし、伝記は新史料による事あれども多は古来の伝説美談を本拠として其思想行動を物語り専ら教訓的説話に重きを置きて精神修養に資せしめ其筆蹟と肖像は確実なる史料に基きて選出するものなれば坊間また得難き珍宝たるべし。茲に本叢書を發行し我国文化の源泉たる思想界の偉人を深く内在的生命に交渉して其言行を発輝し以て其風光に浴せしむは尤も時期に適切なものならんか。

とある。実際の文体も、「皆様今日はご一統によく参詣なされました。真に受け難きは人身遇ひ難きは仏法でございます。」（冒頭）と、説教口調そのままである。

「仏教史談叢書」に類似するパターンは、史談会刊行物にも認められる。山口菊伴『井戸正朋』（島根県史談）叢書第一編、資山堂、一九〇二）など、地域の史談会刊行叢書の第一編の国会図書館所蔵例はあるが、明治期の場合に限ると、いずれも第二編以降が刊行されたかは定かでないものもみられる。これらは、和田悌四郎『越佐史談』（猶興社、一八九七）や志村義玄『岩手県史談』（鶴鳴閣、一九九九）などの教科書と一見似ているようだが、実際に読むと相違点

もまたある。

埼玉史談会編『奥貫友山 第一編 埼玉史談』（実業之埼玉社、一九一〇）の場合、「凡例」にはこうある。「一、埼玉史談会は会名の如く我が県下に於ける歴史上の事蹟にして後進のために裨益あるものを撰び、之を平易に記述して普く学校生徒及一般家庭の読物となさしめんが為に起れるもの、今や其の事業次を逐うて進捗しつつあり。一、埼玉史談は毎編読切とし逐次刊行するものとす。一、第一編として奥貫友山先生を紹介す、先生の人格及事業はたしかに後進子弟を裨益するのみならず、当世一般人士特に富豪の龜鑑たらずんばあらず。明治四十三年九月、埼玉史談会」。

本文冒頭は、田山花袋ばりの文体である。

兵隊の行列を見ると、直に、日露戦争の当時のことが眼の前に浮び出して、軍艦が。……仁川で。……遼陽の占領。……旅順港。……と際限もなくいろいろなことが思ひ出され。虫の鳴く声や紅葉狩の談が始ると、去年の修学旅行の時のことが出てくる、汽車に乗つて。……山に登つて。……軍歌。……足が痛い。……とそれからそれと、あて途もなく思ひ出される様に、今年のやうな大洪水があつて、家も田地も押し流され。いとしい親兄弟が散りくばらくばらになつて行方が知れないとか。

（一、嗚呼洪水昔の洪水と今の洪水」冒頭）

花袋は『奥貫友山』に先行し、また同書に類する数多の地方の埋もれた偉人伝は『田舎教師』に先行し、また文学者たちは田舎の自然に文学を見出そうとする。自然主義文学隆盛期の「文学」は、急速に広義の「文学」概念から遠ざかるが、それでも地誌的特性に「史談」的特性が、跡をとどめる場合があるのではないか。「小説」作品の中にみられる地誌の特性は、作品論の内部に収斂させてしまふだけだと、そのテキストの同時代における特徴の一部——「史談」的であること——を、見失つてしまふかもしれない。

3 多様性・教育成果

史談会刊行物や教科書などではなく、歴史について気軽に語るという意味での明治期の「史談」テキストは、さまざまな分野にわたつて出版されている。大森金五郎『鎌倉時代 通俗史談』（長風社、一九二二）は啓蒙的な歴史概説書であり、足立栗園述『海国史談』（中外商業新報商況社、一九〇五、初出は『中外商業新報』）の場合は、くだけた口調の二百八十の「海国」エピソードと、「余論」の「海国史大観」から構成されている。内村鑑三の『興国史談』（警醒社書店、一九〇〇、もと東京独立雑誌の連載）は古代のエジプト・バビロン・アッシリアやペルシャの歴史を文明論的に論じ、大町桂月は『古今史談』（公文書院、一九二二）で、歴史と歴史上の人物たちを評する。

講演速記録の場合は、基本的に史談会刊行物やそれに近いもので

ある。たとえば重野安繹・小牧昌業著、講話会編『薩藩史談集』（求信堂、一九一三）は、講演調の文体で巻頭に史料写真、巻末には附録として「島津家歴代一覽表」がつく島津鼻貞のテキストであるし、吉備史談会編『吉備史談会講演録』（吉備史談会、一九〇四）では井上通泰他の講演録に、「出品目録」（各家から、開会に際して日記や巻物等を持ち寄った記録か）を附録としているのだ。

他に池辺藤園『少年史談 第一編』（文成社、一九一三）に類する史談叢書を形成するタイプ、俄勃牢（ガボロー）著・宮崎夢柳訳『義勇兵 仏国史談』（盛業館、一八八八）のように歴史的事件を叙する政治小説など、「小説」に近いタイプの「史談」も存在している。バリエーションは多すぎて、枚挙に暇がない。

多様性にみちた「史談」テキスト群。もともと大量に流通した教科書副読本としての「史談」「郷土史談」のスタイルも、実は一様ではない。郷土の風土や人口など統計的資料、神社仏閣、郷土の偉人、特産品など、ある程度のコンテンツの共通性はみられるのだが、その文体は簡条書きに近い型（牧源太郎編『大分県地誌及史談』（甲斐書房、一九〇〇）など）から、偉人伝中心の逸話集のような歴史寄り型⁶、主に地理的事項を扱う地理寄り型（片山周次郎『郷土地理と史談 全』（福井宗吾ほか、一九〇二）など）の三つの系統を中心に、実に雑多なのである。漢字かな交じり、カタカナ交じり、総ルビ、ルビなし、これもまちまちである。

もちろん、しばしば見られる特徴はないわけではないが、本質的

に地誌なので、「郷土史談」テキストが均質な状態で全国に流通したというような事態は起こらなかっただろう。

一例を挙げよう。

野島半七編『温古史談 越後之黒鳥』（野島半七、一八九〇）というテキストがある。巻末広告を見ると、野島書店（野島半七）は小学校教科書や、これに類するテキストを出版している。発行年は明治二十三年なので、小学教則大綱が、歴史・地理・理科の教授は郷土の史談・地形・自然現象より始めるという規定をなす前年である。冒頭に「越後国之古図」、次に「黒鳥詮任之肖像」ほか二名の肖像頁。

同書が実際に、教科書として使われた、ないし使われなかったという証左は稿者の手許にないが、仮に教科書とした場合、読者は多少のとまどいを覚えることになる。

本文冒頭では、同書は落語や講釈の速記録のような「くでございませう」調を用い、総ルビ句読点なしの漢字かな交じり文で、越後人の伝記を語り始める。だが、二頁目から文体が変わる。同じ講釈でも文語体に戻り、修羅場読みの調子になるのだ。末尾には「いわゆる鷗外史伝」風の注がつき、附録には別の考証随筆風「酒顛童子ノ由来」（文語で一貫）。両者とも越後に所縁の伝記とはいえ、いったい読者層をどこに想定しているのだろうか。

「序」は、本書をこう評価する。

噫此書ノ如キハ世ノ史家ノ材料トナルベキモノニシテ世間専ラ行ハル、稗史小説ノ類と同一視スヘカラサルハ論ヲ俟タス
〔序〕より、傍線目野

「稗史小説」ではない、「史家ノ材料」なのだとことごとしく表明すればするほど、その虚構性が目立ってしまい、同書と「小説」はむしろ似てきてしまう。作者は、同書は越後の素封家や豪農に聞き取り調査を行い、その結果に基づいて執筆したと主張する。しかし読物としてのノンフィクションは、現在でいうところの「小説」の一種ではないのか。一八九〇年、つまり明治二十三年といえは「文学」ジャンル内は、いまだ熱い混沌の中にあつたのであり、教科書／歴史読本／読本／小説の別は明確にはされていない。「噫此書ノ如キハ」という主張が教科書でなされることには、何の不思議もないのである。

この『温古史談』と対照すると興味深いのは、この二十二年後に啄木の友人、宮崎一雨が出版した『古今名詩通俗史談』（磯辺甲陽堂、一九二二）であろう。「各項の始めに人口に膾炙した詩を掲げ、其詩に關した史談を物したのは、彼是对照して一層興味を増さしめ、永く記憶に残るやうにとの為なのである」（「自序」より）とある通り、漢詩とそれにあつたる史話を対にした一般向けの読物である。宮崎が本書で引用した漢詩七十のうち、四十が幕末以前の作品、三十が幕末から明治の日本人についてのものである。著者は本書の

執筆意義を、学校教育の補填と主張し、「苟くも国民として、其国の歴史を知らないで済まされるものではない。然るに目下の初等乃至中等教育に在つては、之れを多く教授する時間を有せない為に、講義を聞いても所謂靴を隔て、痒を搔くの気味があり、且又た一旦学校を出て社会に活動する場合には、大部の歴史を自習しやうと思つても、時間に余裕がない為に自然に閉却されて了ふのである」（「自序」と述べる。

二十二年前の明治二十三年には、初等教育のために啓蒙的に歴史を語ろうとして、越後の小学生向けのテキストは講談口調となつてしまつていた。速記録から生じたという近代的文体も未完成であつた。しかし時は移り、大正時代を迎える頃に至り、『刪修 近古史談』の特徴——平明で華麗な漢文鑑賞を通じ、国民的な歴史を学ぶ——と「郷土史談」の方針——国民的な歴史と地理を導入教育として教授する際、副読本として短い読物が必要——を、ミックスし整頓された「史談」概念ができあがつているのである。

ここに、ひとつの教育成果に基づき、ジャンルの再編成をみるこ
とができるだろう。

4 近代的な流布

それでは、このような各種の明治「史談」やその叢書は、どのような成長発展と衰亡の過程をたどつたのか。

大槻磐溪について考える場合、彼の幕末の活躍は確かに重要であ

る。ただし広義の「文学」概念の近代的形成の経緯を考察するならば、明治十年代には、彼のテキストがこれまで以上のペースで流布し始めることと、成島柳北らと『花月新誌』を発行していたことは、それ以上に見過ごしがたい。

先行研究の指摘する通り、明治十七年頃までの大槻という個人の存在感は大きい⁹⁾。だが明治二十年代以降になっても、初等教育を紹介して、彼のテキストは全国的な拡大をみることとなるのだ。

明治期以降の『近古史談』を考察する際、「近古史談の全話中、三割近くが常山紀談に基づいて採られている」「明治大正期の教科書類に教材として採られたものが多い」といった鈴木棠三の指摘¹⁰⁾がある。また「武辺咄集」の中では、『常山紀談』が著名であり、「武辺咄集」の代表のように思われがちであるが、これは、近代活字出版の影響力の結果に過ぎない¹¹⁾という菊池真一の論文もある。

さらに教科書に限らず、近代的出版機構の整備の結果として、新たに大量の近世小説読者が発生したという高木元の指摘¹²⁾など、近世文学研究者たちの言葉は傾聴に値する。おそらく、近代化し変容する「文学」概念の、外枠ににじみ出てゆくかのように拡大する、近世的な逸話テキストの読み手を想定すべきなのかもしれない。

『近古史談』ではなく、「郷土史談」に類する「史談」の流通の場合はどうか。

「郷土史談ヲ以テ其端緒ヲ開キ、進ンデ日本歴史ニ及ブベシ」。多くの「史談」が、小学校令の改正を受けて刊行された。しかし制度

上の流通の時期が、主に明治二十四年から明治三十三年頃までと短く、その後総合的な国語・地理・歴史をあわせた郷土学習に統合された後は、教育史にその名は残らない。三十三年以降もこうしたテキストは発行されるが、次第に減り、重視されなくなる。そのため、教育史上では基本的に、郷土史教育の一部として扱われているようである¹³⁾。

ただし、明治十四年以前から、実際には「郷土地理書」「地方誌教科書」が各地で用いられており¹⁴⁾、明治前半期には、文部省による郷土史学習への配慮（尋常小学校ノ教科ニ日本歴史ヲ加フルトキハ郷土ニ関スル史談ヨリ始メ）があつた。また、郷土誌と地誌には、行政機構や名望家の略伝、方言・歴史事象等の記載が珍しくなく、歴史・地理・国語・伝記などを明確に分けるのは難しい。

そして、前述の宮崎一雨の事例のような教育成果のあらわれがあり、各地の地方史研究を行う「史談会」の発展¹⁵⁾、さらには後述する事例なども併せ考えると、郷土史研究を深め、故人の墳墓を探索し、郷土に根ざす歴史文学に心を寄せる昭和期のメンタリティが構築される際には、『近古史談』や「郷土史談」は、ひとつの重要な因子となった可能性がある。

一 教授時数は、前半学年中凡そ六十時間を充つべし、而して後半学年に至り、始めて本邦の地理、及史談に入るべき順序に従うを要す。

一 教授者の都合によりて、史談の事項を省かんと可なり、此の時は、教授時数を凡そ三十時間とすべし。(「緒言」、高城与五郎編『小学福井県誌』、一八九五)

中川浩一の指摘によると、知識詰め込み式に陥りがちな史学地理教育は、その問題点克服の一環として、地図や旅行体の本文などの試みのほか、このような児童の興味をひきそうな方法を採用していたという。ここに引用した事例のように、題名に「史談」と書かれていないテキストもしばしば存在する。

東京でも地方と同じように、「史談」は教えられていた。「東京府郷土誌は、明治二五年三月の東京府令第一四号にもとづき、高等科第一学年生徒に、『郷土ノ地理、及び史談ヲ授クル』目的で編纂された。」⁽¹⁷⁾と言われるように、都市と対立する地方ではなく、郷土教育が、史学地理と密接な関係を保っていたのである。

こうした「史談」テキストの読者たちはやがて大人となる。その頃、どんな出来事が生じただろうか。

5 「史談会」とその残照

本会が大正二年の秋創立されて以来、その事業の一として親しく史的趣味を涵養する為、折々郊外の史蹟の踏査研究が続けられて来ました。その際携へて実地の指針とし又同好の士の参考ともする目的の下に、大正十二年に我々の先輩数氏により

「史蹟を探る人々に(東京郊外篇)」が刊行されました。その後更に是を底本として調査を重ね、内容にも大いに補訂を加へて殆ど面目を一新し、昭和二年の春「東京近郊史蹟案内」が刊行されたのであります。(「自序」、一高史談会編『大東京史蹟案内』(育英書院、一九三二)、七頁)

「史談会」。明治以来、「史談会」は地方の歴史愛好家の同好会として各地で活動を行っていた。大正期に発足する新たなタイプの「史談会」は、これとは異なる。現在もある地域史研究会としても発足しはじめるのである。

しばしば、昭和初期の江戸趣味・懐古趣味の理由の説明として、一九二三(大正十二)年の関東大震災が挙げられる。むろん、大震災はもつとも重要な因子だが、明治天皇崩御や「史談会」ほか、すでに大正前期にレトロスペクティブな志向が、多様な側面からできあがっていたのである。

一 高史談会の著作物には、他に『史蹟を探る一日の旅』(東文堂、一九二五)、『東京近郊史蹟案内』(古今書院、一九二七)などがある。⁽¹⁸⁾「史談」をふくむ初等教育の制度下で教育を受けて育った日本の児童たちは、やがて高等教育の学舎で、各地の教育委員会下で組織されてきたような「史談会」を組織するに至ったのだ。

一 高史談会の、江戸趣味醸成への影響や会その後の経緯などの詳細は、まだ稿者も十分調べられなかった。しかしその刊行物は現

在の東京各区の「史談会」による地誌編纂のさきがけになったといつてよい側面もあり、明治期から大正期を経て昭和期へと変化する「史談」や実歴もの、地方史研究志向のメンタリテイを理解するのに、大正期「史談会」とその刊行物は、ある種のメルクマールとなるのではないか。

ちなみに『史蹟を探る一日の旅』奥付では、著作者は「一高史談会編集代表者 長沢規矩也」である。

地方史（地誌）型、啓蒙型などが代表的であった明治期の「史談」のタイプは、やがて変容する。大正期になると、「史談」はまづ各種の史談会刊行物の名称、そして回顧録のジャンル名としての用例が増えるようになる。

この会（同好史談会のこと＝目野注）について明らかではないが、明治中葉いらい流行していた名士の談話を速記する会の一つであることはたしかである（略）……本書の出現は他の回顧ものの登場をうながし、横瀬夜雨の『明治初年の世相』『太政官時代』（史料 維新の逸話）新人物往来社、（中略）その他が続々出版された。いわば本書は、昭和初年の史談大衆化のさきがけをなしたといえる。²⁰

「史談大衆化」という文中の語（紀田順一郎の言）は、おそらく回顧録の範疇に分類される「史談」の刊行が、急速に広まった状況を

指すのではないだろうか。例えば、現在でも新人物往来社などは回顧録・伝記の名としてしばしば「史談」を用いる。この場合の「史談」は各出版社独自の、「伝記」のサブジャンルとして理解することも可能であろう。

大正の名残を、昭和にみる例を挙げたい。「東京名墓顕彰会」と機関誌『掃苔』（一九三二年十一月―一九四三年十二月）の発行人夫妻である。

同会は呉秀三の「壊滅しかかっている宇田川槐園の墓地の救済を」という希望から発足（創刊号記事）。会長は一八六五年生まれの三上参次であり、『掃苔』では『史伝閑歩』等の著者森銃三が中心となって活躍した。会員はエリート層だが、アカデミックな史学や文学からは離れ、地域史研究の知的なグループ活動を行った。昭和期に再編成された「史談会」活動といえそうだが、編集発行人藤浪剛一とその夫人和子は独自の存在感を示す。

「東京名墓顕彰会」も『掃苔』も、連絡先は藤浪剛一である。一九四二（昭和十七）年の彼の逝去後、和子が編集発行人を引き継ぐ。彼女は一九三四（昭和九）年からの踏査結果として、一九四〇（昭和十五）年に『東京掃苔録』を刊行。同書は一九七三年に八木書店から再刊され、さらに『続日本史籍協会叢書』²²に収録されるにいたるのだ。

そんな藤浪夫妻は、夫が一八八〇年生まれ、妻が一八八八年生まれである。夫が十一歳の頃、初等教育の制度の一部として、児童に

楽しく史学地理を教えるための「郷土史談」が開始され、妻が十二歳になる頃に消える。前述のように、「史談」の教育制度上の成立前にも後にも、初等教育での郷土史教育は珍しくはなかったが、藤浪夫妻の地域研究は、特に前後の世代と異なる意味を持つのではないだろうか。戦後、初等教育で「史談」を習わなかった世代があらわれる。新世代の教育委員会と多く連動する地域研究「史談会」活動と、藤浪夫妻の活動内容は近似するが、最も古い「史談」教育の記憶のありなしだけが異なるだろう。

6 最後に

一九〇一年生まれの歴史学者宮崎市定は、若き日に西アジアを旅して、「どうも地理学は地図や統計だけでは駄目である。今の地理書には、余計なことが少しも書いてない。やはり昔の本のように、たとえ雑駁に見えても、実地にぶつかった体験などを、ごちゃごちゃと寄せ集めた方が本当のところが表われて面白いと思う。この点では地理と関係の深い歴史学においても同様なことが言える」と記している。⁽²³⁾ これこそ、大文字の「文学」概念時代の「歴史」であり、殊に「史談」であつただろう。「余計なこと」というのは過剰な情報のことではなく、史談めいたもの——児童に歴史への興味を持たせるための、物語的な逸話——だったのではないだろうか。⁽²⁴⁾ まさに「史談」に近い世代の感慨といえよう。

「歴史」「伝記」「文学」のジャンルの境界線は、その国によって

様々であるが、歴史とも文学とも不即不離の「史談」は、明治期を過ぎると次第に各種史談会刊行物へと収斂してゆく。昭和期、特に戦後に飛躍的に増加する「史談」タイトルのテキストは、そのほとんどが地方史（地域史）研究会としての史談会の刊行物となり、複雑で多様性をはらんだ用例は、過去のものとなるのである。⁽²⁵⁾

注

(1) 日本の戦前の郷土教育については、宮原兎一『社会科教育史論』（東洋館出版社、一九六五）三三―四〇頁が、要領よくまとめている。また、影山清四郎「明治末期の郷土教育についての考察——「国民的社会的修養」を中心に——」『教育学研究集録』（東京教育大学大学院教育学研究科、第10集、一九七一年三月）は、「郷土史談」を含む明治後期の郷土教育について詳述。平山和彦「郷土教育運動と郷土史教育」（加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編『講座歴史教育 1 歴史教育の歴史』（弘文堂、一九八二）収録）では、大正期以降に重点を置いて郷土教育史を論じている。前掲書によると、①郷土科や郷土教育全般は戦前期を通じて行われたが、「史談」というテキストが一般的だったのは明治期まで、②明治期の郷土史は、修身・国語・地理・歴史等と離れて存在するものではなく、いずれかと連合する教科だった、という。

(2) 地方の教科書副読本の収蔵には限界がある。愛知・石川・大分・神奈川・京都・埼玉・長野・広島・兵庫・福島などの史談・地誌

は地域別や改版を含む複数種を収蔵。北海道・奈良・長崎・熊本・宮崎・沖縄などは所蔵がないが、存在しなかったとは考えにくい。

(3) 「解説」、菊池真一編『近古史談 本文篇』(和泉書院、一九九六)、三九七—三九八頁。

(4) 若林力『近古史談全注釈』(大修館書店、二〇〇二)、xii頁。

(5) 吉岡亮は明治十年代の小学校の歴史教育を論じ、その志向は文
明史的言説と儒教的徳の言説の狭間にあると述べ、特に文明論的観
点からは統計資料から把握できる「気風」、儒教的観点からは経書
の言葉と善事美談の例話が用いられていることを指摘する。「儒教
主義・文明史・愛国——明治十年代における教育の中の〈歴史〉
——」『国語国文研究』(北海道大学国語国文学会、第一二七号、二
〇〇四年七月)。「郷土史談」テキストに、しばしば統計資料がほ
ぼそのまま引用される点や、郷土の特産品・地政学的論及がみられ
る点などは、明治期の郷土教育としての「史談」が稗史・歴史より、
「文明史」に近かった可能性を示唆するかもしれない。

(6) 例えば、鹿児島県私立教育会編『訂正 鹿児島県史談 全』
(吉田文弁堂、一八九九)など。同書は歴代島津藩主の略伝部分が、
訂正前の版の三人から七人に増えている。目次を挙げると、以下の
ようになる。

波多市松編『鹿児島県史談 全』(吉田文弁堂、明治二十八年)

第一課 郷土史談／第二課 可愛ノ山陵／第三課 高尾ノ山陵／
第四課 吾平ノ山陵／第五課 高屋ノ行宮／第六課 鶴嶺神社／第
七課 武田神社／第八課 松原神社／第九課 島津義久公／第十課
徳重神社／第十一課 島津久公／第十二課 照國神社／第十三課

島津久光公／第十四課 西郷隆盛、大久保利通／第十五課 僧月照
／第十六課 鉄砲／第十七課 煙草／第十八課 甘藷／第十九課
鹿児島沿革の概要／附島津家歴代表。「緒言」には、「此書は、本
県教則第九条の趣旨に基き、一昨年来余が奉職の学校生徒に、郷土
史談を授けんがため、教案として編集せし」云々とある。

鹿児島県私立教育会編『改訂 鹿児島県史談 全』(吉田文弁堂、
明治三十二年、訂正三版)

第一課 鹿児島／第二課 島津忠久／第三課 桂庵／第四課
島津貴久／第五課 島津忠良／第六課 鉄砲／第七課 島津義久
第八課 島津義弘／第九課 薩摩焼／第十課 新納忠元／第十一課
琉球征伐／第十二課 調所広郷／第十三課 島津斉彬／第十四課
島津久光／第十五課 英艦ノ来寇／第十六課 西郷隆盛、大久保利
通／第十七課 甘藷／第十八課 煙草／第十九課 鹿児島ノ沿革。
「例言」によると、「本書ハ、鹿児島県教則第九条ノ旨趣ニ基キ高
等小学校歴史科用ニ充ツル目的ヲ以テ編纂シタルモノナリ。」とい
う。両者はほぼ同じ型だが、前者は地元の地誌解説が優先され、後
者は島津氏家系の解説が優先される。前者を地理の授業、後者は歴
史授業用とみることもできるが、ほぼ同一の印刷仕様であり、後者
は前者の改訂版かと思われる。近世中期以降の往来物の特徴には、
特産品中心と為政者中心がある。前者の方がより由来は古いが、明
治二十年代から三十年代初頭の教科書は、いずれに比重をおいても
おかしくない。往来物の場合、為政者の力の強いのは江戸型や駿府
型である(石川謙編『日本教科書大系 往来編 第9巻 地理
(一)』(講談社、一九六七)が、統計や特産物などに重きを置く文

明史的論述は、地方の往来物が産業を重視した記述を行ったことと連続してゆくと考えることもできるだろう。石川前掲書によれば、地誌型の往来物が商業的な特産物紹介から離れ、歴史や伝記に重点を置くようになったのは明治初頭。往来物は学制以後、次第に地理の教科書に換わるが、『地学初歩』ではまだ歴史寄り。ただし明治の教科書では、地理科でも歴史科でも「史談」は存在する。

- (7) 加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編『講座歴史教育 1 歴史教育の歴史』(弘文堂、一九八二)。同書八五頁によると、嘉永・安政頃から、国体論に基づく日本史学習熱が強まっていた。また、当時「磐溪が『近古史談』を編じた意図は、外国船の来航によって、幕府の指導者を初めとして国内の多くの人々が右往左往した原因を分析した結果、今こそ、「太平の遊惰を鞭策して、士気を鼓舞する一助」(『近古史談叙』)が必要であるとしたことにある。」(『解題』、若林力『近古史談全注釈』へ大修館書店、二〇〇一、xii)。さらに「江戸時代に書かれた史伝もの」(「あとがき」、同、三九七頁)など、江戸後期の漢文による日本史は、幕末志士や明治壮士、学生などの好むところであったと考えられる。

- (8) 宮原兎一前掲書参照。
- (9) 井上弘『近代文学成立過程の研究』(有朋堂、一九九五)
- (10) 「解説」、湯浅常山著・鈴木棠三校注『定本 常山紀談 下巻』(新人物往来社、一九七九)、四七一頁。
- (11) 「武刃咄」の成立と展開」、水田潤編著『近世文芸史論』(桜楓社、一九八九)、九五―九六頁。
- (12) 「近世後期小説受容史試論」、国文学研究資料館編『明治の出版

文化』(臨川書店、二〇〇二)、九一―九二頁。

- (13) 「史談」という語単独での教育史上の用例調査は、管見の限りでは見つけられなかった。

- (14) 中川浩一『近代地理教育の源流』(古今書院、一九七八)、二〇五頁。

- (15) 各地の史談会は、教育委員会の支援を受けて構成され、地域の教員などを構成員として振興を図るのが通例であると、東北大学の梶山雅史(現・岐阜女子大学)氏からご教示を頂いた。

- (16) 中川前掲書。

- (17) 中川前掲書、二一三頁。

- (18) 「二高史談会は、一高生の歴史的知識の向上を図るため、瀬戸校長、斎藤・箭内両先生等の御賛助の下に、大正二年に起されたものである。…近年は、前述の目的を達する為に、講演会、読書会、研究会、研究旅行、参観等をやつて居る。」(『附五』一高史談会に就いて)、一高史談会編『史蹟を探る一日の旅』(東文堂、一九二五)、二七頁)。同書「内容について」(三頁)では執筆者九名(石山乾二・鳥羽正雄・小笠原光寿・建部元春・中村栄孝・長沢規矩也・太田秀一・古谷善亮・迫水久常)を紹介している。

- (19) 大正期に入ると、各史談会による、旅行ガイドと地誌研究を兼ねた「史談」テキストの刊行がはじまり、現在まで継続することとなる。たとえば、足立区の足立史談会(足立区立郷土博物館内)の刊行物など。よく見られる形態は、(元)教師らが図書館や博物館内に研究会を置き、地元コミュニティとして、教育委員会と連絡しつつ活動するタイプであろうか。昭和期以降は、史談会刊行物や伝

記・回顧的な歴史談話を「史談」というケースが増加するが、これは明治期の用例に直結するのではなく、大正期の用例が拡大したと考えるべきであろう。

(20) 紀田順一郎「解説 文明開化の証言者たち」、同好史談会編『史話 明治初年』（新人物往来社、一九七〇）、三九七―三九八頁。本書は復刻版。底本は一九二七年に春陽堂から刊行。

(21) 『東京掃苔録』「序」には、「家事の閑を偷んで」「六年といふ年月」をかけて書き上げた旨記されている。

(22) 東京大学出版会、一九八二。底本は『東京掃苔録』（東京名墓顕彰会、一九四〇）。八木書店による再版（一九七三）もある。

(23) 『西アジア遊記』（中公文庫、一九八六）。底本は『菩薩蛮記』^{むすまん}（生活社、一九四四）。

(24) 「史伝」ジャンルの盛衰時期も、「史談」に近似すると思われる。以前、拙論で明治二十年代末から三十年代半ばまでは一般的だった雑誌の「史伝」欄が急速に衰亡し、大正初期にはすでに時代遅れとされていた件を論じた（頼まれ仕事・史伝——明治31年から始まる『鷗外史伝——』『文学研究論集』（筑波大学比較・理論文学会、第十五号、一九九八年三月）、『明治三十一年から始まる『鷗外史伝』』（溪水社、二〇〇三）に収録）。

(25) 一応のめやすとして国会図書館の収蔵状況を確認したが、一八六八―一九一三年の四十五年間で「史談」を含む用例は、百九十七件であったのが、一九一四―一九四五年の三十一年間で百六十三件、一九四五―二〇〇五年の六十年間では四百十八件と、戦後には戦前の倍近い発行ペースがみとめられる。一九一四―一九四五年では、

教科書（副読本）は激減するが、『近古史談』とその解釈書は教育・受験用テキストの需要が落ちなかったらしく減っていない。また注(19)ですすでに触れたように、大正期には各史談会が、地域のガイドブックとしての「史談」を刊行しはじめる。そして岡本偉業館「史談文庫」（立川文庫の亜流）も当時刊行を開始。伝記的物語としての意味も、まだ生きていたのである。戦後には史談会刊行物とドキュメントとしての「史談」の点数が大多数となり、漢文教育テキストの『近古史談』は消滅する。浅野晃が『少年少女日本史談』（偕成社、一九五八―一九五九、全八巻）を出版しているのは、戦前の「少年史伝叢書」「仏教史談叢書」「史談文庫」や講談社の同種の刊行物などとの連続と乖離の相で考察すべきだろう。稿を改めて論じたい。また、戦前の各地の史談会刊行物が、復刻版として戦後しばしば刊行されている。

※ 旧漢字は新漢字に直し、ルビを省いた。本稿は二〇〇四年十一月二十一日の国際日本文化研究センターでのシンポジウム発表「史談——その変遷」を、大幅に改訂したものである。発表の場やアドバイスを与えて下さった鈴木貞美先生、梶山雅史先生に感謝する。また、青田寿美氏には本稿に関し、大変お世話になった。本稿は日本学術振興会の科学研究費採択（若手B）による調査とその成果である。日本学術振興会の協力に感謝する。